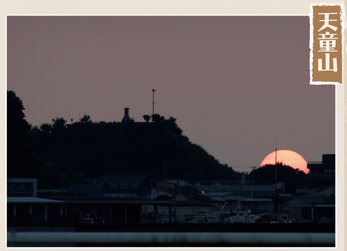
天童山



南北朝時代（一三三六～一三九二）、山形県天童城にいた北畠天童丸が、鰺ヶ沢に城を構えたという伝説の地。

江戸時代の初期には津軽百助（三代藩主の弟）の城があった。昭和七年（一九三二）に始まった鰺ヶ沢築港工事で切り崩され、山は半分くらいしか残っていない。

現在は鰺ヶ沢港を一望できる公園になっている。

護岸跡

漁具倉庫

鰺ヶ沢漁港は、戦後も、漁船の大型化などに対応するため拡張を続けた。

埋立地には、かつて海岸線であったことを物語るコンクリート製の護岸跡が頭をのぞかせ、当時の漁具倉庫が建ち並ぶ。

昭和の薫りをただよわせる港の遺産が、あたかも年輪のように残されている。

弁天崎

江戸時代には岬の先端に常灯（行台）があった。

岬からは、日本海に面した港の町並みと、その後方にそびえる岩木山を大パノラマで眺めることができる。

江戸時代の絵図から近代の絵葉書まで、多くの作品に描かれた景色は今なお素晴らしい。

鰺ヶ沢漁港

昭和七年（一九三二）に始まった鰺ヶ沢築港工事では、湾内を埋め立てて岸壁を整備し、多くの漁船を係留できる船だまりを作り、弁天崎の延長に防波堤が築かれた。

八年の歳月と巨費を投じ、のべ二十万人の人夫を動員した大プロジェクトであった。

当時の埋立地や防波堤は、今も揺るぐことなく港を支え続けている。

桝形

文化二年（一八〇五）頃に富根町ができるまでは、ここが町はずれであった。

富根町は「舟町」とも書き、津軽藩のお早舟（軍船）が置かれていたことに由来する。

今に残る折れ曲がり道路は、町境を守った「桝形」（城下町などでみられる）の名残りとされている。

町奉行所

江戸時代に港町を管轄した津軽藩の町奉行所。

海岸が埋め立てられる前までは、奉行所のすぐ手前が砂浜であった。

当時は、鰺ヶ沢湾内に停泊している北前船から、小船でここに荷物を運んでいた。

北前船に飲み水を積み込むための井戸もあった。

漁師町

新地町

江戸時代から漁師たちが暮らしていたとされる漁師町。

かつて魚問屋を営んだ町家などが軒を連ね、町並みに歴史を感じることができる。

小さな小路（ヅンコ）を抜けると新地町。

今でこそ静かな裏通りだが、旦那衆の一夜の夢がさんざめく遊郭街であった。

鰺ヶ沢駅

大正十四年（一九二五）五月に開業した鰺ヶ沢駅。

駅の場所は、鰺ヶ沢側で意見がまとまらず、隣の舞戸村に決まったという。

駅のすぐ横には、五能線全通の翌年、昭和十二年（一九三七）に建てられた鰺ヶ沢保線区の旧建物が今日も行き交う電車を見守っている。

中村川と橋

中村川にかかる橋は、昔は舞戸橋だけだった。

江戸時代には、橋のたもとに番所と木戸があり、町への出入りを取り締まっていたという。

戦後になってから、明海橋（昭和三十五年）、水屋大橋（昭和六十年）、なぎさブリッジ（平成十四年）と次々に橋の数が増えていった。

歴史を語る坂

坂木の坂

江戸時代の西浜街道（弘前～鰺ヶ沢）から変わることなく、急な一本坂を上り下りしなければならない。

ズンドの坂

隧道の図（『鰺沢出入録』）

ズンドとは隧道（トンネル）のこと。

五能線ができる前は台地がつながっており、ここに長さ約七十二メートルのトンネルがあった（明治十七年に開通）。

ホイド殺しの坂

ホイドとはヒ食のこと。

昔、飢饉で飢えた人たちが、この小さな坂を上りきれずに大勢死んだという。

鰺ヶ沢温泉

太平洋戦争末期の昭和十八年（一九四三）、石油の試掘を行ったところ、石油の代わりに湯が噴出したのが始まり。当初は「上の湯」。

戦後は温泉旅館「鰺ヶ沢温泉山海荘」となり、現在は安東水軍をイメージした「水軍の宿」の名で親しまれている。

台場跡

江戸時代末期、外国船の襲来に備えて津軽藩が作った砲台。

明治時代初めの箱館戦争の時にも、五稜郭の旧幕府艦隊から鰺ヶ沢を守るために大砲が置かれた。

船乗りたちの願い

船絵馬

江戸時代から明治時代にかけて、鰺ヶ沢に寄港した北前船主らが神社に奉納した。

絵馬には自分の持ち船を描き、航海の無事安全を祈った。

鰺ヶ沢町中央公民館でレプリカを見学できる。

つわものどもが夢のあと

板碑

昔の武士たちが、死者の供養のために建てた石の卒塔婆のこと。

南北朝時代（一三三六～一三九二）、鰺ヶ沢は安東水軍の勢力下にあり、彼らが残した仏教文化の遺産とされている。

田中町裏の墓地（通称・山寺コ）と、舞戸の舘に残されている。

港町をとりまく神社

鰺ヶ沢は神社が多い港町である。

江戸時代からある六つの神社のうち、弁天崎の胸肩神社を除く五つの神社が、海と町並みを見おろす山の中腹に鎮座する。

参道の石段を上ると、全ての神社が共通して東向きに建てられている。

鰺ヶ沢にみられる独特の歴史景観である。

白八幡宮

豊受美神社　神明宮　石上神社　稲荷神社

北前船が伝えた文化

芭蕉塚

江戸時代の俳人松尾芭蕉の功績をたたえ、その句を刻んだ碑を芭蕉塚という。

鰺ヶ沢では、高澤寺庭園と、岩谷の丘の上に芭蕉塚が建立されている。町内の寺院には辞世の句を刻んだ風流な墓石も多い。

上方との交流によって、俳句をたしなむ文化人が多かったことを物語る。

芯去柱　願行寺

明治十六年（一八八三）、東本願寺再建の木材を積んだ金毘羅丸が福井県沖で沈没した。

積荷だったケヤキの巨木が鰺ヶ沢沖まで漂流、当時再建中だった願行寺本堂の柱などに使われた。

年輪の芯がないことから芯去柱と呼ばれ、今も美しい姿で本堂を支え続けている。

庭園　高澤寺

高澤寺の場所は文化八年（一八一一）から七ッ石町となった。

寺の裏にある庭園は、西海岸地方で屈指の規模と景観を誇る。

多くの文人墨客が集い、庭園を愛でながら句会や書画会を催した。

薬師様

道叟道愛禅師が南北朝時代（一三三六～一三九二）に高澤寺を創建したとされる場所。

当時、日本最北の曹洞宗寺院だった。

現在は薬師様のお堂があり、ゆかりの石碑が建立されている。

高澤寺は、江戸時代に米町に再建され、後に七ッ石町に移った。

受け継がれる歌と踊り

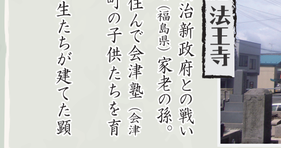
鰺ヶ沢甚句碑

鰺ヶ沢甚句は、北前船によって秋田・北陸地方から伝わったとされる盆踊り歌。

海を渡り北海道民謡にも影響を与えたとされている。

近代になり廃れていたが、戦後、再評価され復活した。

ゆかりの碑が奉行所跡に建立されている。



鰺ヶ沢音頭碑

鰺ヶ沢音頭は昭和七年（一九三二）、鰺ヶ沢築港工事起工を記念して作られた。

当時の港町の情景を、津軽弁を織り交ぜた名調子で歌いあげる。

戦後も長く町民に親しまれ、はまなす公園に記念碑が建てられた。

円空仏　延寿院

江戸時代、全国を行脚した名僧・円空が彫った。

漁師の網にかかり海中から拾い上げられたと伝えられている。

延寿院に薬師如来としてまつられ、その慈愛に満ちた表情から「微笑仏」とも呼ばれる。

漁師をはじめ多くの町衆から信仰されてきた。

水ふきのイチョウ　來生寺

樹齢四百年以上。

來生寺創建の記念樹として植えられたものとされている。

享保五年（一七二〇）に再建された本堂は、鰺ヶ沢最古の建築物。

大火に襲われたこともあったが、イチョウが水を吹き出し本堂を守ったという。

港町を支えた教育

岸文靖碑　法王寺

岸文靖は江戸時代末期、鰺ヶ沢に岸塾を開き多くの英才を育てた。

当時、津軽地方で屈指の教育者であった。

法王寺に、その功績を称えた墓道表が建っている。

伊藤得三郎碑　西海小学校

伊藤得三郎は明治時代の旧西海小学校校長。

北前船が衰退し港がさびれた時、子供たちを奮い立たせ、町の次代を担う人材を育て上げた。

顕彰碑は、現在の西海小学校に受けつがれている。

北原房夫碑　法王寺

北原房夫は明治新政府との戦いに敗れた会津藩（福島県）家老の孫。

鰺ヶ沢に移り住んで会津塾（会津学校）を開き、町の子供たちを育てた。

法王寺に門下生たちが建てた顕彰碑がある。

北前船が伝えた名菓

薄いあずき色と上品な甘さが特徴の鰺ヶ沢名物。

ルーツは、江戸時代に北前船が伝えた京菓子とされる。

かつては数軒の鯨餅屋があったが、現在は「本舗村上屋」が伝統の味を受けついでいる。

鯨餅

浪花煎餅

江戸時代、浪花（大坂）出身の商人が、砂糖をたっぷり塗った煎餅を売り出した。

北前船が運んでくる高級品の砂糖を使った鰺ヶ沢ならではの名菓だった。現在は「銘菓の店 山さき」で作られている。

日和山

北前船の船乗りや地元の漁師たちが、日和を見る（天候を予測する）のに登った場所。

岩木山の遥拝所でもあり、昔は、お山参詣に行けない人がここにお参りしていた。

安政五年（一八五八）に建立された岩木山の形をした石がある。

山に樹木が多くなる前は、ここから日本海や北海道が良く見渡せた。